

生きる「いしづえ」として

～今、自分にできること～

吉 成 正 士

◎ 全同教開会行事によせて

第46回全国同和教育研究大会の開会行事として、これまで私を頑張らせ続けてきた、良き先輩であり、良き師である本校の森口教諭が特別報告を行った。この特別報告は、今まで私たちに関わってきた者全ての想いをのせたものであり、それはそれは重く、しかし明日の未来を力強く見据えた報告となった。当日までも、何度か目を通した原稿である。しかしその度ごとに、熱い思いはたくさんの映像となって、原稿を透かして目の前を通り過ぎていった。当時の生徒の顔が浮かんで消え、また様々な場面が浮かんで消えていった。内容によれば、（森口教諭個人のことであり）見たことのない場面であるにも関わらず、たくましい想像力が幻影として浮かばせてきた。そしてその中の自分になったかのようにも感じられ、目が汗をかき、原稿がぼやけてくる。鼻水までもが流れ出してくる。自分がまだまだ弱いのか、それとも原稿が素晴らしすぎるのか……。どちらとも言えない。おそらく両方だと思う。そんな発表を、本当に、本当に心待ちにしていた。聞くだけとなる私までもが、何かしら重大な決意をするかのごとく、覚悟をして開会行事に臨んでいた。残念ながらアスティとくしまで応援することはできず、文理高校体育館で「峠を越えて」の展示係員として、また一聴衆として臨んだ。多くの挨拶等にも、今までにないくらいの集中力で耳を傾けていた。だんだん時間は迫ってきた。胸は待ちどおしいドキドキと、緊張したハラハラが交錯していた。いよいよ名前が呼ばれ、スクリーンいっぱいに馴染み深い姿が登場する。もうその時には、私の前にあったものはスクリーンではなく、実物像だった。一言も聞き漏らすまいという必死の思いが「峠を越えて」を展示している場から、会場内へと歩ませた。それこそ導かれるように足が勝手に動いた。発表がされていく。今まで以上に様々な思いが、溢れるように、津波のように押し寄せ、暗い会場をよいことに、私は涙をボロボロこぼしていた。その中で私は、宙を駆け巡る、振動を伴った森口教諭の声を聞いた。

「おいっ！しゃんと聞つきよるかっ！」

本当に聞こえた。ふと我にかえって、それから冷静に周りを見回した。動くものは何もない。ただわずかに歩いている人のみ。しかしそれも、座っていられずに「峠を越えて」を買いに出てきた人であった。私は展示場へと戻った。その時（その間のいつのことかは忘れたが）妙に冷静になった私の中のもう一人の私の目に、スクリーンのすみでなされていた手話通訳が映った。趣味で手話をやっている関係上分かったのかもしれないが、明らかに手話通訳している人もが、変わったのを覚えている。感情が入り込んでいた。あんな手話通訳を見たのは初めてだった。やがて発表も終わりの時がやってきた。万雷のような拍手喝采だ。嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。しかし冷静に考えると、本人を目の前にして拍手を浴びせるのなら分かるが、スクリーンに向かって拍手をしているのである。妙だ。だがそれほど会場の人々にしみ込むような特別報告だったのである。そんな中で、私はまるで自分に拍手されているかのような思いすらしていた。顔をクチャクチャにしてしまうほど嬉しかった。しかしそんな感傷も束の間。やがて人の波が展示場に押し寄せてくる……。

とにかくすごいラッシュだった。「群がって来る」と言ってよいほどの人ばかりだった。必死だった。しかし嬉しかった。特別報告を聞いている喜びとはまた別の喜びがわいてきた。みんなに、一声一声かけていきたいくらいだった。そんな中で、買っていただいた人々の中に二人、忘

れられない人がいた。

「すいません、1冊下さい。」

雑踏のざわめきの中で、かき消されてしまいそうな声だった。しかも正面から買いに来たのではなく横から、ほとんど裏から買いに来たと言ってもよいほどだった。忙しく、なかなか一人ひとりの顔まで見るができなかったが、ふと見たそのお婆さんの顔は、横を向いていた。〈あっ？もしかして視覚障害？〉すぐに1冊の本とおつりを用意した。その時私は左手に本を持ち、そして右手は、お婆さんの手を包んでいた。おつりも、しっかりと手のひらにおさめるように、包んでいた。

「ありがとうございます。」「いえ、ありがとうございます。」

心がほころんだ瞬間だった……。

そしてもう一人の買い手は、私の真正面から来た。

「5冊下さい。」

〈えっ？…ありがたい！〉と自分の耳を疑うと同時に、すぐにそう思った。売れば嬉しいのであるが、たいていは1冊づつである。それを5冊というのだから、驚いた。忙しい中ずつとうつ向いていて、前なんか見る余裕はなかったのであるが、その時ばかりは、深々とおじぎをした。そして〈どんな方だろうか？〉と思い、興味半分に顔を上げた……。〈えっ？……〉そこにあったのは、母の顔であった。私の母の顔であった。一瞬私の中の時間が止まった。動揺もしていた。それでも平静を装い、

「どしたん？」

苦し紛れに出した言葉だった。

「講演聞つきよってな、一緒に来とる人にも読んでもらおうと思うて……。」

嬉しかった……。ただただ、嬉しかった……。私は過去の学習指導案に、とにかく母の一言一言を捉えて汚く罵るような、家庭内の見苦しい実態をさらけ出したことがある。その母である。その場では、それ以外に特に会話することはなかった。事務的に5冊の本を用意し、代金を受け取った。ただそれだけである。けどその場の空気は、周りとは別ものだった。今思い出すと、その空気は、忙しく動いていく周りの雑踏の中でゆっくり動き、静かだった。そのことで、母が私の全てを理解してくれたとは思っていない。しかし、硬く凍てついた母の心を溶かすようになってきたのであれば、本当に嬉しい。「人は変わる」その言葉をあらためて実感した1日だった。そして、新たな頑張るエネルギーを胸に蓄えた1日でもあった。今までの苦労が全て「礎」となり、これからも私は固い石のごとき意志の杖で自分を支えながら、頑張っていくことができる。私を支えてくれる全てに感謝して、これからも私は歩き続ける。

◎ 全同教前日の全体学習によせて

私はこの文章を書くに際し、今までにないくらい頭を抱えた。こんな思いをしたのは初めてである。というのは、全同教前日の全体学習についての感想を書くのであるが、どこから書き初めていいかわからなかったし、どこまで書いていいのかもわからなかったからだ。つまり手のつけようがなかったのである。もし今の段階で書きようがあるのなら……。

※

『この授業をするための準備は、4月からもうすでに始まっていた。その時点で「今まで自分が全体学習を通して学んだ部落問題学習の全てを、この1年に凝縮しよう。」と決意していた。そのために、漠然とした1年間を通した自分自身の心づもりを頭に描いた。その中の基本的かつ重要な事柄の一つとして、学級経営の構想が頭の中に1番にあった。………』

※

この全体学習に至るまでの話をすれば、様々な思いがとめどなく溢れてくる……。『よせる思い～灯し火であった者たちへ～』の最後に記した、プランターによる花植え。修学旅行前日の話し合い。今回の資料「母より」のもととなった部落問題意見発表会。全員が団結した体育祭。文化祭で全員参加した人権劇「山田少年」。今回の指導案にも記した「サライ」に関わっての出来事。生徒会役員選挙立候補にからんでの熱い討論。そして、それまでに4回繰り返されていた全体学習……。それ以外にも、手話・点字クラブを通じての様々な生徒との関わりや、私が個人的に積むことのできた研修、また日々の生活で感じたことを含め、本当にそれまで全ての出来事がこの全体学習を支えた。全体学習直前には、生徒の要望により手紙を出した谷村新司から、思いがけず返事が届いた。それが、3日前の11月22日の出来事である。

※

『お手紙ありがとうございました。「サライ」が沢山の人に愛されているということを、改めて実感しました。当日はリハーサルのため行けませんが、成功を祈っています。「夢は夢にあらず」この言葉を贈ります。頑張ってください。11月19日 谷村 新司』

(本冊子中に掲載)

※

この授業についての思いを記すことは、それまでの取り組みを記すことになってしまい、残念ながら今の段階ではまとめ、綴りきることができない。それでも思ったことや感じたことの一端を綴っておきたい。

(今年度の取り組みは、別に年度末に「いしづえ」としてまとめる。)

※

大変多くの方々の励ましの中、生徒たちはどうあっても頑張らねばならない状況になっていく。しかし生徒たちは、むしろそういう状況を楽しんでいるかのように私には感じられた。

※

『いよいよ明日が本番。今からすごい緊張しています。母といろいろ明日のことを話し合いました。あっそんで掃除の時間に、後藤田先生に聞いたけど、37年ぶりに徳島で全同教あるって聞いて、私思うけど、37年ぶりに徳島県で行われて、そんで徳島県でこの板野中学校、2年E組が授業するって考えると、もう緊張しまくるけど、私はすごい好運に恵まれていると思います。今日体育館を見てドキッとしました。すごいイースです。ア然としました。先生がグループになって授業するって言ったとき、私はそっちの方が安心すると思いました。何でも話せる友だちが横にいたら、相談もできるしいです。明日はきっと緊張すると思うけど、頑張りたいです。人を意識しないで、教室ですると思って。そして歌も、大きな声で歌いたいです。』

※

しかしその反面、私自身にはずっと悩み続けてきたことがあった……。

今までの学習形態の欠点として、喋れない生徒がそのままにされてきた現実があった。どうにかせねばと思いながらも「頑張れ！頑張れ！」「授業はみんなでつくるものだ。」と言い続けていた。しかしそう言われたところで頑張りがきれるものではなく、余計な劣等感を抱いたり、おざなりな発表をしたり、私が追いつめていたように感じる。だから、どこかで隙間ができていたことを感じていたし、発言している子の発表がどこか空舞いしているような気がしていた。数学に得手不得手があったり、長距離走に速い遅いがあったりするように、発表だって同じなんだと思う。しかし思いがないわけではない。あるのである。あることを信じてはいた。しかしその思いを引き出しきる手だてが、私には分からずにいた。そんな折「友」について授業をしたときのこ

とだった。我が「友」のことについて語っている光景がすごくほほえましく感じられた。そしてその学習と、数学の授業で取り組んでいるグループ学習が結びついた。どんな子でも、気心知れた小集団なら、自分の意見や考え、思いを伝えられるかもしれないし、自力で発表できていくまでは隣や前の「友」が代弁するという形で授業に参加できないだろうか。そういう形の発表があってもいいのではないだろうか。ただ、最終的には自ら自分を語っていくというところまでたどりつかねばならないのだが「それまでの策（プロセスの一つ）として認められてもいいのではないか。」という発想が浮かんできた。ただ、1番最初のグループを構成したときの基本は「まだ今は一人では立てんけど、この子とだったら少しづつ頑張れそうな気がする。この子とだったら、思うことつまりながらも言えそうな気がする。この子とだったら自分の思い代弁してもうてもいい。」とした。本来なら、一人につながるのには他の生徒全てでなければならぬと考える。誰が1番、2番という問題ではないと思っている。しかし仕方なく、付け焼き刃的な発想として編み出した。

本来なら数日後に控えた全同教前日祭の授業には差し控えるのかもしれないが、将来的な展望の一つとして、全体学習をより良いものとしていくための一つのプロセスとして、敢えてやってみることにした。何の根拠も無ければこんな冒険もできないのだろうが、前述した様々な取り組みの中で、生徒達の適応力を私はすごく評価していた。時には私からかかってくる重苦しいプレッシャーをはねのけてきたし、時には体育館の舞台裏で授業をしたこともあった。人権劇もした。また、学活を通して、常に自分達で問題解決していくすべを学んでいた。そんな生徒達を見てきたからこそ、できたのかもしれない。

実は私は前日の放課後、誰もいない体育館に生徒たちを入らせた。そのだっ広い空間を見せたかったのだ。そして「明日はこの場にいるんだ」という実感を味わわせたかった。ところが、生徒たちは無邪気なものである。はしゃぐ、はしゃぐ……。落ち着いたところで、私は学活をさせた。数日前にグループ学習をするということは表明していたが、席の並びまでは何も考えていなかったのだから、考えさせたかったのである。それからいつものごとく私はだんまりを決め込んでいた。ただただ話し合いを見つめていた。様々な形態が検討されたが、最終的にコの字型となった。友だちが横にいる方が安心でき、またバラバラになるのではなく、できる限りつながっていたいというのである。しかしその中でグループの話し合いができるように並ぶのであるが、今思うとその瞬間が一番不安だった。どうも、真ん中から右は男子、左は女子に、真二つになりかけているのである。「別に変でない」と言われればそれまでだが「できることなら入れ違いに……。」と私は願っていた。もうほとんど位置も決まりかけ「もうダメか!」と諦めかけたところで、一人の男子生徒が声に出した。

「ちょっと、こなあと分けてええん？」

私はやつとのこと、内心ホッとした。その後何人かが私の所に尋ねに来たが

「先生にきいてもしやあないわだ。ほら、みんなにきいてみいだ。」

と私は突き返した。そして結局、入れ違いになった。その話し合いが終わって体育館を出たのは6時だった。その時私は「またいい体験させてもらった。」と感じた。と同時に「明日は大丈夫。」という確信をも抱いた。現にその1つとして「座って歌うこと。」と言っていた「サライ」の歌を、いつのまにか生徒たちは立ち上がって歌っていた。後で聞くと「本当は舞台上でピアノを弾いているKMの所で歌いたかったんだけど、そこまではできそうになかったから、せめて立って歌いたかったんだ。」と言う。恐れ入った。生徒たちのたくましさに感服した。

※

授業自体が良かったとか悪かったとかいうことについて結論づけるのはおかしい話だと思って

いる。自画自賛になるが、良い面もあったとは思ふ。しかし毎度のことながら、反省させられる面があったことは否めない。

以前私はある高校生の研修会で、居ても立ってもいられず、いの一番に手を挙げ発言をした。その時の発言内容まで覚えてはいないが、高校生に「各校での現状にくじけることなく、その素晴らしい頑張りを続けて下さい。」と、自分ではエールを贈ったつもりでいた。ところが返ってきた発言は「そうやって生徒任せにするから高校でなかなか頑張れないんじゃないでしょうか。」と、強い反発であった。私は「えっ？いやいやそういうつもりで言った訳では……。」と思ったが、そこで時間は切られてしまった。この出来事は、今でも情けない事の一つとして強く私の心に刻まれている。後になって冷静に考えると、その時私は中学校の教師であるということを明かさず（一個人として参加していた）しかも、実は私の周りに座っていたのは高校の教師ばかりだったのだ。その時と同じ過ちを、実は今回もしてしまったように感じている。心の中には「2Eの授業なんだから、敢えて今までに2Eの教室で語ってきたことについて触れなくてもいいんじゃないか。」という思いがあった。また「私自身のこの学習によせる思いは、事前に「よせる思い」や「学習指導案」としてまとめているし……。」と思っていた。そして生徒たちには「今回の授業はみんなの授業なんだから、先生にはしゃべる時間を与えるな。先生に時間を与えると最初から最後までしゃべってしまうぞ。」と言っていたし「いつもみんなだけでやっている学活だと思え。」とも言っていた。その結果がああ授業となった。しかし、自分自身どこかで物足りないものを感じるようになった。何故か？それは、自分の底からこみ上げてくる本音の語りが少なかったからである。私はそう分析した。実際に以下のような感想が寄せられた。

※

『……5時間目の先生の発問等や授業の進め方に疑問が残ります。部落問題学習をすすめていくうえで、教師も一人の人間として自分の気持ち等を語らねばならないのではないのでしょうか。生徒も尊敬できる一人の人間として授業をすすめていたのか疑問が残ります。』

※

常に自分をチェックして歩まねばならない。人には（特に私には）波がある。グッと頭を持ち上げる時と、シュンと萎えてしまう時である。放っておくと、どちらにもなりきってしまう恐れがある。またいろんな方面の事柄を吸収していないと、いつどういう方向に片寄るかもしれない。そのためには、いろんな書物を片寄りなくたくさん読む必要があるであろうし、また多くの人との出会いを大切に、その人たちの声に耳を傾ける必要があるのだと思う。そうしていく中で、常に自分自身をチェックしていくのだと思う。簡単に言えば、謙虚になるということだろうか。そういう姿勢が、やはり必要に思う。特に今年度の私には為すべき事がありながら、自分の力不足から、そのことが全くと言っていいほどできなかったのである。自分の力のなさを本当に痛感した1年であった。（まだ終わっていないが）ややもするとシュン太郎になってしまいそうだが、そういうわけにはいかない。もうすでに、私の中には貫くべき信念が宿ってしまっている。これからも日々大切にしながら、自らを磨いていくのみである。ただそれしかない。強い意志の杖を抱き、そして「今、自分にできること」を問いながら……。